

東京芸術祭ファーム 2024 ラボ  
ファーム編集室 アーカイブブック

Tokyo Festival Farm 2024 Lab  
The General Archive Book written and edited by Farm Editorial Office



## ファーム編集室より

ファーム編集室は、東京芸術祭の人材育成・教育普及部門である「東京芸術祭ファーム」の活動を記録し、発信するためのプロジェクトです。2022年から毎年、公募で選ばれた参加者（アシスタントライター）を中心に、ファームのさまざまな活動に立ち合い、そこで行われている対話や議論、創作のための試行錯誤の様子を、言葉にとどめ、伝えることに取り組んできました。

今年、活動に帯同することとなった Asian Performing Arts Camp 2024 で掲げられたキーワードは「互恵」。弱さや差異を含めて互いを認め合うことで共に変化を経験することを目指したキャンプは、何を話すかということ以上に、どう話することができるのか、どう共にいられるかを探究することに多くの時間を割いているように見えました。そしてこのことは、ふたりのアシスタントライターにとって、事前に想像していた以上に本質的な問いを向けられる経験ともなりました。記録者（報告者）とはどのような立場か、あるいは創作における言葉の役割について――。

ですから、ここにまとめられた記録は、キャンプの参加者だけでなく、ファシリテーター、アシスタントを含む制作スタッフ、そしてファーム編集室のメンバーすべての経験、思考の痕跡です。2024年の秋に、こうした場づくりへの実践が試みられたこと、その記録が、これからの芸術祭にはもちろん、さまざまな芸術創造の場につながっていくことを願います。

ファーム編集室室長 鈴木理映子

## Asian Performing Arts Camp 参加メンバー



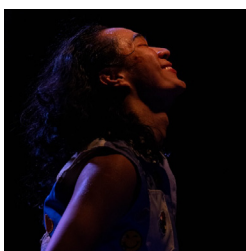
キム・ナミョン — ソウル（韓国） Namyoung Kim – Seoul (North Korea)

1999年生まれ。韓国を拠点に活動するアーティスト。主にオブジェを用いた舞台芸術作品を制作する。攻撃と守備を同時にこなせる身体を目指す。機能するオブジェと自身の身体を組み合わせるプロセスを通して、作品内にムーブメントを生み出す。観客を外部の第三者とみなさず、積極的にパフォーマンスに参加させている。代表作に『Beside Me』『Camouflage』等がある。自立型教育パフォーマンス集団『Perbuhae』メンバー。



李漢廷（リー・ホンティン・マイケル） — 香港 Hon-Ting Michael Li – Hong Kong

1994年生まれ。香港を拠点に活動するインディペンデント・プロデューサー、キュレーター、ドラマトウルク。芸術のエコシステムと作品の関係性を主たるテーマとして探求する。身近なコンテキストと積極的に関わり、そこに対する建設的な応答としてプロデュースやキュレーションを行う。2020年、インディペンデントスペース「小田工作室（ティン・プロジェクト）」を設立。研究開発プラットフォームのキュレーション、レジデンスのファシリテーション、作品ベースではないアートイベントの運営を行う。



リー・リム — メトロマニラ（フィリピン） Lee Lim – Metro Manila (The Philippines)

2000年生まれ。フィリピンを拠点に活動する演劇・パフォーマンスの新進アーティスト。フィリピン大学ディリマン校学士課程のシアターアーツプログラムでパフォーマンスを専攻。クィアアーティストとして、クィアの経験の複雑さの中で生き抜くために、演技、ムーブメント、ドラマトウルギー、集団創作、パフォーマンス現象学、クィアパフォーマンス研究といった手段に興味を持つ。直近のパフォーマンス作品である自伝的な『LINUS (they/them)』は、出生から成長の過程で抑圧されていた自身のクィア性を取り戻すものだった。

(Photo: Venn Baniqued)



長田ボンシリ・アリサ — 東京（日本） Alissa Osada-Phornsiri – Tokyo (Japan)

1994年生まれ。東京を拠点とするアートマネージャーであり、フェミニズム、コミュニティ、ケアを中心とした学際的なアートプロジェクトのコーディネーターと管理に興味を持つ。日本人とタイ人の子どもとして生まれたアジア系オーストラリア人。あらゆるアイデンティティや背景を持つ人々が公平かつ自由に自己表現できる職場環境を創り出す方法を模索しながら、アートマネージャーとしての役割を理解しようと努めている。2023年に異文化・学際的なアート集団である(O)Kamemochiを共同設立。



サキ・ウパデーエ — ニューデリー（インド） Sakhi Upadhyaya – New Delhi (India)

1995年生まれ。インド・ニューデリーを拠点とする応用演劇の実践者であり、演劇アーティスト。パフォーマンス、研究、遊び心といったアイデアを中心に活動を展開し、アイデンティティやコミュニティ、可能性や限界、コレクティブとしての人類の未来について、いかにあらゆる年齢の人々同士で有意義な対話を生み出すことができるかを模索している。『Rihla』（サラン・フェスティバル）、『Bhagi Hui Ladkiyan』（EQUAL フェスティバル、META セレクションおよび審査員特別賞）、『Mahish』（ランガ・シャンカラ・フェスティバル）等の演出に関わる。7年間、様々な学校やNGOで演劇教育に携わっており、アショカ大学の社会学・人類学部のティーチング・フェローでもある。

P.1	ファーム編集室より・Asian Performing Arts Camp 参加メンバー
P.3	全日程レポート
	8/25 オンラインキャンプ #1 (P.4)
	9/1 オンラインキャンプ #2 (P.4)
	9/16 コミュニケーションデザインワークショップ (P.3)
	9/18 竹中香子 ワークショップ (P.3)
	9/18～21 参加メンバーによるワークショップ (P.5)
	9/22～23 6okken 訪問 (P.8)
	9/23 通訳レクチャー (P.3)
	9/23 円盤に乗る派との交流会 (P.7)
	9/25 岡田利規 ワークショップ (P.7)
	9/25 公開レクチャー (P.9)
	9/26 寺田健人 ワークショップ (P.7)
	9/28 最終プレゼンテーション (P.6)
P.10	ファシリテーターインタビュー 竹中香子×田村かのこ
P.13	参加者インタビュー キム・ナミョン
P.15	プロセス発信記事①
	他者の身に起きたことを自らの言葉で語る
	不安、迷い、違和感のなかで「互恵」に辿り着く過程（今宿未悠）
P.18	プロセス発信記事②
	互恵を可能にする場づくり
	「共感」と「興味」を土台に、変わり続けるという試み（柳原実和）

# 全日程レポート

2024年の夏から初秋にかけて、14日間にわたり行われたキャンプ。その全プログラムを、【交流、対話の土台をつくる】【自分と互いを知る】【ゲストとの交流／視界を広げる】の3つの柱を軸に紹介する。

## 交流、対話の土台をつくる

2024/9/16 月曜日

### コミュニケーションデザインワークショップ

コミュニケーションデザインチームは、国際協働の現場で、参加者全員が安心して創作に挑むことのできる環境を整えるため、企画段階からキャンプのプログラム設計に関わっている。その運営には、出自などにかかわらず安心して発言できる環境（セーフスペース）が必要であるとし、レクチャーとグループワークが行われた。その様子は録画され、プログラムの一部を見学するファームラボビジターにも共有された。

キャンプ内での主な使用言語である英語は世界中で話されており、それぞれの土地の言語・文化の影響を受けている。レクチャーを通して「それぞれの英語に優劣はなく、単に異なるだけである」と学んだ。また、英語の特徴として、誰かに言及する場合は必ず代名詞が必要になる。キャンプ内では、他者を決めつけない・分類しないための実践として、各人が希望する代名詞の確認と、それを尊重することが徹底された。

グループワークでは、コミュニケーションにおいて大切にしている価値観と、そのために実践できることを考え、メモし共有した。レクチャーで「セーフスペースは参加者同士の対話を通して構築され、更新され続けるもの」と学んだことから、各グループのメモをキャンプ終了まで貼っておくことになった。



2024/9/23 月曜日

### 通訳レクチャー

コミュニケーションデザインチームは、公開レクチャーと最終プレゼンテーションの日英通訳も担当した。通訳レクチャーのテーマは、通訳者と信頼関係を築くこと。メッセージをどれだけ伝えることができるかは、単なる言葉の互換ではなく、文脈やニュアンスの共有にかかっている。そのため、キャンプ参加者はあらかじめ、できる限りの考えと、全ての資料を通訳者と共有することが求められた。それは一見、アドリブを否定しているようでありながら、むしろ発表の自由度を高めるためのコミュニケーションである。

2024/9/18 水曜日

### 竹中香子 ワークショップ

竹中が実際に演劇の教育現場で使っているワークを行った。ひとつの目は「I can…」に続く文章を書き出すワーク。オンラインキャンプで自己紹介を終えていたが、その時には知り得なかったそれぞれの新しい一面が見られた。キャンプ期間中「演劇はひとりではできない」と、竹中は何度も口にした。他者と協働するには、互いを知ることだ。

続いて、演技の基本「物語を語ること」を使って、以下のグループワークを行った。

1. 自分にとって大切な物について、Aが写真を見せながら語る。
2. BがAの話をも三人称で語る。
3. BがAの話をも一人称で語り直す。
4. Cは一連の様子を観察し、Bの中でどんな「演技」が生まれたのか発表する。

犬好きのリーが、サキの愛猫について語ったり。代々韓国人の家系であるナミョンが、さまざまなルーツを持つアリサの家族の歴史を語ったり。一人称によって他者を想像する体験になった。竹中にとって演技とは、他者と自分の「違い」を体で知覚する行為だという。即座に憑依するのではなく、他者を一人称で語る際の違和感・距離感を大切に、役に近づいていくというステップが俳優の心身を守ることにつながる。





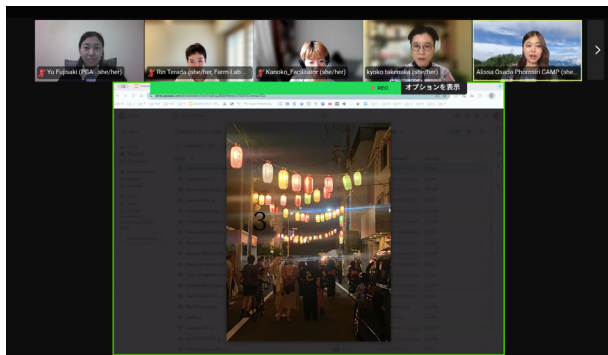
## 自分と互いを知る

2024/8/25 日曜日

オンラインキャンプ #1

初めて全員の声を聞いたオンラインキャンプ。「Favorite neighborhood」というテーマで一人ずつ写真を持ち寄り、それぞれの生活と視点が垣間見える自己紹介となった。

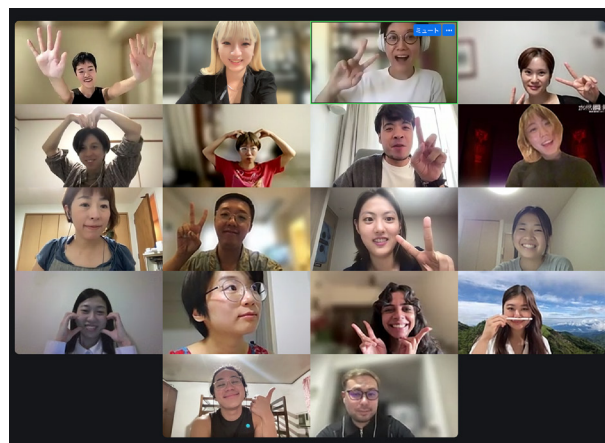
ガイドラインの読み合わせ、ハラスメント講習では、自分の見方・考え方の枠から出ることの難しさを確認し、具体的にどんなことがハラスメントだと考えられるのか、互いを尊重した対話の場を作るためにどんな実践ができるのかを学んだ。より良い創作のためには、ポジティブではないフィードバックが必要なこともある。Farm-Lab オフィスのアドバイザーとして本講習を担当した植松は「ある人の結果について自分の意見を伝える時、その結果は氷山の一角でしかない。それだけを見てその人の在り方・存在自体に踏み入ったり、決めつけたりしてはいけない。また、普段からポジティブなフィードバックを伝えておくことも、関係性の保持のために重要である。」と語った。



2024/9/1 日曜日

オンラインキャンプ #2

今回のキャンプ参加者は、「未来へ向けたプロジェクトに積極的に取り組み、次世代にも還元していく意欲のある人」という指針のもとで選ばれた。2回目のオンラインキャンプでは、彼らの最終プレゼンテーションのテーマである「ドリームプラン」を、キャンプ参加者だけでなく、ファシリテーター、スタッフ全員がプレゼンテーションした。未来のことなら、キャリアの差によるストレスを感じずに語ることができる。不確実な未来を語ることに對する恥ずかしさや緊張も見られたが、それをもそのまま受け入れ、共有する時間となった。



2024/9/18 水曜日～9/21 土曜日

## Asian Performing Arts Camp 参加メンバーによるワークショップ

### ①ティン（リー・ホンティン・マイケル）

タロットカードを一枚引き、それに対して何を感じているか？を質問によって引き出すワーク。ティンいわく、質問者は「誘導せずに、回答者の言葉のみから質問を考えて」とのこと。案外難しく、良い質問とは何か？を考える機会になった。

### ③ナミョン（キム・ナミョン）

ペアになり、ペンと粘土で記録しながら、相手の過去を自分の言葉で語り直した。小さく現実的な脚色を加える、記録から全く違う物語を想像する、自分の過去と結びつける……相手を尊重しながらどのように語り直すことができるか、それぞれ模索することになった。

### ⑤サキ（サキ・ウパデアーエ）

「集団として私たちはどのように過去を記憶するのか？」インド分離独立を背景にした問いに、サキは遊びと想像の力を使って導こうとしていた。グループワークのテーマは、「遠い未来、国家の概念がない時代に向けて博物館を作るなら、何を残したい？」。

### ②アリサ（長田ボンシリ・アリサ）

ケアについての9つの質問を、みんなで考えて、付箋に書いていくワーク。時間がゆったりと流れる中、一つひとつの問いにじっくり向き合った。書ききったら、それをミックスして、誰のものかわからない状態で読み上げていく。

### ④リー（リー・リム）

ドラッグを象徴するヴォーギング、シェイクスピアのソネットの解釈とそれにもとづいた創作プロセスを通して、それぞれが自分自身の美に対峙した。ドラッグの表現方法の一つであるリップシンクを披露するリーに、一同釘付けになりながら、音楽やドラッグの力を借りない「ありのままのリー」のパフォーマンスも見てみたいという声も。





2024/9/28 土曜日

## 最終プレゼンテーション

今回のキャンプの総まとめとして、一般のオーディエンスも迎えて行われた最終プレゼンテーション。ワークショップやレクチャーなど、さまざまな形で対話と交流の時間を重ねたキャンパーたちは、それぞれの方法で未来に向けた「ドリームプラン」を語った。

### ①ティン

自らの運用している共同体における構造的な問題について丁寧なプレゼンテーションを行っていた。生物学を履修していたティンらしく、業界の構造を細胞でたとえる場面も。

### ③アリサ

集団で何かを始める際の、キックオフのワークとして「ケア」をテーマにするこの提案。ライブ性高く、紙芝居のように展開されていた。手書きの文字に込められた体温、あたたかみがあった。

### ⑤サキ

「人は『国家』という概念とどのように関わるのか？」新聞でできた人形を使って、自分の考えのプロセスを語るサキ。観客にこう問いかける。「50年後、あなたの国についての博物館ができます。そこに展示されるものや資料の一つ選ぶとしたら？」。



最終プレゼンテーション写真  
撮影：松本和幸

### ②ナミョン

ある人と過ごした日々を忘れる・思い出す過程をパフォーマンスに。アートトランスレーターユウメ（森本優芽）は、穴の空いた紙にナミョンの言葉を記録していく。会話を通して2人は親密になっていき、ナミョンがユウメのそばに座ることで穴が埋まり、円が完成する。

### ④リー

舞台上に這いつくばって登場したリー。空腹と渴望の音を喉で鳴らしながら、観客の動作を必死にコピーする。しかし、他人の中に自分のアイデンティティはないと気づく。舞台中央にはドラッグのヒール。それを履いて堂々と立ち上がり、リーは颯爽と歩き去った。



2024/9/23 月曜日

円盤に乗る派との交流会

東京芸術祭で、『仮想的な失調』の上演を前日に終えたばかりの、円盤に乗る派のカゲヤマ气象台（演出・脚本）、蜂巢もも（演出）、日和下駄（俳優・制作）を迎え、キャンプ参加者との交流会が行われた。

ふたりが共同演出をした今作では、カゲヤマの演出に対して、蜂巢がさらに演出をする「超演出」という方法をとった。「演出家は全ての決定権を持っている」と考える蜂巢は当初、演出家を名乗って「超演出」をすることに戸惑いがあったという。対してカゲヤマは、創作の過程でみんなが衝突しないための「ひとつのパスベクティブ」として演出家の仕事を捉えていた。また、俳優目線の意見として、日和は演出家との間にヒエラルキーを感じることが少なかったと振り返った。それは脚本家・演出家も含めた全員がテキストを中心に創作を行っていたこと、円盤に乗る派の集団の在り方として「複数の作家・表現者が一緒にフラットにいられるための時間、あるべきところにいられるような場所」を掲げていることによるものだという。

キャンプ参加者から観劇の感想を募った際、ディジュリドゥを演奏する場面が話題になった。それはオーストラリア大陸の先住民が、儀式や祭事で演奏する楽器である。伝統的に男性が演奏するその楽器を、女性のキャラクターが演奏することにどんな意図があったのか。そこに意図がないのであれば、知識の穴が文化の搾取になりかねないと指摘があった。



2024/9/25 水曜日

岡田利規 ワークショップ

「誰の目にも見えないけれど、イメージーションがそこにあることを、私たちは確かにわかっている。」岡田がワークショップ中に何度も口にしてきた言葉である。

ワークショップの中核は「自分の家を他の人に説明する」ワークだった。キャンパー一人ひとりが前にでて、みんなに向けて、自分の家の話をする。玄関のドアの構造や、ともに暮らす家族の表情、テレビで流れている音などが、それぞれの声と動きによって表現される。そこにあるのはただの空間だが、私たちは、確かにそのドアや表情や音を、捉えられているように感じた。

幼少期から現在まで、さまざまな家を再現するものがおり、みんなとても表情豊かで、それぞれの個性が色濃く滲み出ていた。また、質疑応答においても、身体的な動作とイメージーションの関係性について、大いに盛り上がった。

演劇の持つ、人の想像力を喚起させる力を、あらためて感じる時間となった。



2024/9/26 木曜日

寺田健人 ワークショップ

「My small actions change the world around me」。寺田のレクチャーの冒頭スライドはこのような文言から始まった。寺田は、社会が作り出した「性」や「生まれ」に関する諸規範によって人々の行動・思考が決定されていくことに関心を持ち、主にパフォーマンスと写真を軸にして制作を行なっているアーティストである。レクチャーにおいては、規範を乗り越えていくための共同体としての取り組みなどを丁寧に語って下さった。

特に、「想像上の妻と娘にケーキを買って帰る」という、「父親」としてあるべき姿を演じる写真作品にキャンパーたちは興味津々だったように思う。コミカルに軽やかに、この世に存在する規範を批判し、共有する手つきは、まさに「small actions change the world around me」である。

キャンパーたちそれぞれにとっての「the world around me」とはなんのことを指しており、それをどのように変えていけるのか。考える機会となった。





2024/9/22 日曜日～9/23 月曜日

## 「6okken」訪問

キャンプが折り返しを迎えるタイミングで、1泊2日の6okken合宿が開催された。6okkenは山梨県にあるアーティスト・ラン・レジデンス。河口湖や富士山が一望できる絶好の環境の中、参加者全員で親睦を深めた。

6okkenと今回のキャンプは、「制作活動の手前にある環境を考える」という理念を有する点で共通している。このような制作に対する態度は、制作活動の手前にある環境作りに取り組んでいるキャンパーたちにとっても大きな刺激になるはず。合宿にはそういった思いが込められている。

6okkenにつくと、まずは代表である筒 | tsu-tsuによる6okkenツアーが行われた。6棟の建物を巡りながら、ここで今までどんなクリエイションやコラボレーションが起きてきたのかについて説明を受ける。

その後、筒 | tsu-tsuの実践している「ドキュメンタリー・アクティング」を実践するワークショップが行われた。6okkenでは合宿前日、メンバーたちによるバーベキューが行われていたらしい。ワークショップは、そこにいたメンバーの誰かひとりを選び、その人がどういった人で、バーベキューの場でどういった行動をしていたのかについてインタビューしたのち、実際にその場面を演じてみせる、というものだった。

キャンパーたちは丹念にインタビューを行い、演じてみせていた。時には笑いもありつつ、「知らない人に、よく知らない状態でなりきること」によって生まれる罪悪感について何名かが言及していた点が興味深かった。他者の問題を、自分の表現としてどのように扱うのか、改めて考え直す時間となった。

夜が深まれば、皆でテーブルを囲んでご飯を食べた。その後の時間はそれぞれに任せられ、空が白むまで話し込むメンバーもいた。6okken最大の特徴として、生活を営む上で、アーティスト同士が寝食を共にしているという点が挙げられる。起き抜けの状態や、夜の酩酊の中、ぐちゃぐちゃになった部屋から出てくるアイデアがあるという理念がある。この理念を反映するかのように、夜の時間に、それまでできなかった話を熱心にするキャンパーやほかのメンバーの姿を見られた。夜はあっという間に更けていった。



2024/9/25 水曜日

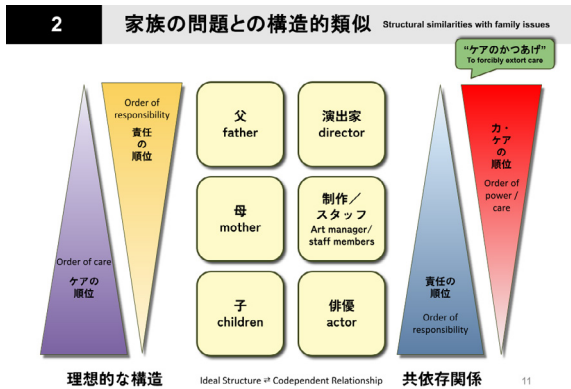
公開レクチャー「創作の環境をアップデートするために。今こそ『構造』の話をしよう～信田さよ子氏を迎えて～」

家族におけるDVの問題と、演劇におけるハラスメントの問題は多くの共通点があるのではないかと考えたファシリテーターたちによって、臨床心理士・信田さよ子によるレクチャーが実現した。信田は、1970年代から依存症・嗜癖の問題に取り組み、1996年以降アダルトチルドレンという言葉がブームとなる、火付け役の一人となった。DVの問題に積極的に取り組んでおり、ハラスメントや性犯罪についても造詣が深い。

具体的に、家族と演劇業界の共通性とはなんだろうか。加害者が被害者に対して「これはあなたのためにやっているのだから」という圧力がかけたり、被害者自身が「自分の心が弱いのがいけないのだ」と過度な自責思考を持つことで、自らの身に起きていることを被害として認識できない状態が発生する点あげられる。信田はそういった不健康な組織においては「いちばん立場の弱い人から壊れていく」という。また、この不健康な組織を変えるきっかけも立場の弱い人にある場合が多いそうだ。「立場の強い人を変えようとしても無駄」と、信田は言い切っていた。彼らは、立場の強さを維持したがるからだ。まず弱い人が被害に気がつき、そこから連鎖反動的に、立場の強い人を変えていく。「立場の強い人が変わってくれるかもしれない」という期待を捨てるこの態度は、ある意味で潔いものであり、当事者として奮い立たせられるものであった。

しかしながら、演劇業界においては、こういったハラスメントの問題に奮闘する意思があっても、それを行う限り自分のクリエイションが疎かになるという懸念がある。あちらを立てればこちらもたまたず、という状況の中で、やはり最優先は自分のクリエイション、となると、問題は看過され続けてしまう。では第三者が問題に介入すれば良い、とも思うが、それをするには、業界全体にお金がなさすぎる。家族とは異なるレイヤーにおける難しさを発見する機会ともなった。

キャンパーたちからは、自国において問題視されているハラスメントやその対策などについての質問も出た。国が違えば、前提となる構造のあり方も、そこで何が問題になるのかも違ってくるだろう。自分で組織を運営している人たちだからこそ、今回のレクチャーの内容をもとに、自分のコミュニティにおける健康的な組織作りのためのヒントと、それを実現することの難しさをあらためて実感する機会になったのではないだろうか。



写真（スライド画像を除く）  
撮影：松本和幸



## ファシリテーター インタビュー 竹中香子＋田村かの子

### キャンプ前：「互恵」を軸に対等な場づくりを

—— では、キャンプの準備の話からお聞きします。今回、「互恵」というテーマを設定した背景にある問題意識や思いをあらためて教えていただけないでしょうか。

田村かのこ（以下「田村」）

私には自分は「作り手」ではないという認識があります。もちろんクリエイティブな表現をしているけれど、それはあくまでトランスレーターとして。だから、キャンパーに対して何かを教えるというよりも、参加者同士がいろんなことを感じ考えることをサポートする、というのが、私の仕事かなと思っていました。そのうえで、どのようにしたらキャンパーたちが弱い部分をさらけ出したり、シェアしたり、エンパワメントされる環境、互恵が生じる環境を作れるのかということを考えていね、と（竹中）香子さんと話していました。そして自分の作品を作ってる人だけじゃなくて、コミュニティや環境を整えるために、何か活動している、もしくは活動したいと思ってる人に参加してほしい、という気持ちも強くありました。キャンプは作品の話だけをする場所じゃないから。作品をつくるだけでなく、自分のまわりでコミュニティを作ったり、プラットフォームを整備したりと、演劇界から世界をどうしていくかみたいな部分を見据えて活動している人が来てくれた方が、お互いにシェアできるものもあるし、連帯できるのではないかと考えていました。

竹中香子（以下「竹中」）

キャンプの中で公開レクチャーをするということはあらかじめ決まっていたので、まずその枠で信田さよこさんをお呼びすることにしました。準備のために、制作チームと読書会や議論をする時間を設けたんですが、その時間がとても充実していて。演劇業界の構造に対して、それぞれが違う立場から活発な議論ができました。（田村）かのこさんが提案してくれた「互恵」というキーワードに対する考え方も、この議論を通じて深めていけた気がします。

正直、それまで「互恵」という言葉を使ったことがなかったので、最初はピンときていなかったんです。でも、議論を進める中で自分が演劇教育をやっている時にも気をつけていることとの結びつきを発見できました。たとえば、教師としてカリスマ性を持って教室に入っていっちゃうと、生徒さんたちが私のいうことを全部鵜呑みにしてしまうようなことが起きるんです。だから私は現場で「いかに舐められる存在になるか」を大切にしています。私は英語が苦手なんですが、でもそれを恥ずかしながらさらけ出していくことによって実はほかの人のサポートを誘発していることにも気づきました。そういうことも、互恵というテーマに絡んでいるなど。

—— ご自身が個人的に、このキャンプで実現したいと思っていたことはありましたか。

田村

私はこれまでコミュニケーションデザインチームのチーフとして、トランスレーターとしてキャンプに参加してきたので、そうではないファシリテーターという立場で場を作っていくということ自体が大きな挑戦だと感じていました。私自身、先ほどお伝えしたように作家とは名乗ってはいないけれど、クリエイティブな仕事をしているという自負はあります。同様に、たとえばアートマネージャーやドラマトルクといったような立場を名乗ってやっている人も、自分のクリエイティビティを存分に解放できる場がある方がいいと思っていました。正直、アーティストがいると、みんな遠慮しちゃうんですよ。アーティストがいちばんの表現者で、あとはサポーター、みたいな関係性になっちゃう。そうではなくて、アーティストと名乗っていない人もクリエイティブに、対等に力を発揮できる環境を作ることができたらと思っていました。

竹中

私はファシリテーターという役割に挑戦してみたかったです。去年はカナダへと、自主的にファシリテーターの研修を受けに行くほどで、とても興味がありました。



## キャンプ中：制作チームと連携し、プログラムを更新し続ける

—— キャンプ中のおふた方を見ていて、常にプログラムを更新し続ける姿勢を感じました。たとえば、キャンプ参加者によるワークショップ後のフィードバックの時間の使い方は、日毎に変化していったように思います。ファシリテーターとして、あの場をなぜ更新し続けていたのか教えてください。

田村

事前に「どんどん更新していこうね」という話をしていたわけではないのですが、香子ちゃんの間でお互いに、そういうものだろうという認識はありました。どんな5人が集まって、どんな空気になるのかは始まってみないとわからない。もちろん事前の準備は頑張るのだけれど、それでも準備しきれないことはわかっていたというか。

竹中

あともうひとつ、制作とファシリテーターの距離がすごく近かったということも、臨機応変に変えていけた理由かなと思います。その関係性は私が普段活動しているフランスに近いものを感じました。常に企画段階から一緒にいて、何かちょっと困ったことがある時に、すぐに直接相談できる。お金や時間、プランニングに関する困りごとがあれば、すぐに一緒に動ける体制があることがありがたかったです。日本の現場でこういうことは珍しくて、契約の内容に書かれていないことかもしれないし、ここまで頼ってしまってもいいのかなと不安になることも多いのですが、今回はそういった心配をしなくて良かった。

田村

先ほど香子さんが話していたように、事前にみんなで議論を深めているので、そもそもなぜこのスケジュールなのか、ということも、制作チームも理解してくれている。だからこそ、急な変更をしたいといっても、その変更の意味まで汲み取ってくれるというか。いちいち説明しなくても、了解できている感覚がありました。それは香子ちゃんと私の間にもあるなと思っていて、何を問題だと感じるのかという感性が似ていた。だからこそ、話して、すぐに行動に移していきました。

竹中

2週間のキャンプのスケジュールには、ちょこちょこ余白があったじゃないですか。その時間も全部キャンプに捧げることになるのは予想していました。日本の教育だと、有言実行、言ったことは最後まで守らなければいけないというような考えがある気がして。でも演劇の業界にいて、うまくやっている人を見ると、割と軸がなくて、みんなが言っていることを「あ、それいいね」って受け入れて変えている人が多い。先生という立場にいたとしても、昨日と今日で言っていることが違ったとしても恥じる必要はないなと思っています。

## キャンプを終えて：ふたりの挑戦

—— キャンプを経て、考え方や思いの変化はありましたか。

田村

自信に繋がりますよね。自分が伝えたいと思ったこととか、こうしたらいいんじゃないかって思ったことがキャンパーたちに伝わって、それがいい形で表出していくのを見て。そんな中でも、キャンプ参加者のリーについて印象に残っている出来事があります。オンラインでドリームプランを話した時は、シェークスピアのソネットを7年間かけてパフォーマンスすると言っていて、「本当に？」と思ったんです。なぜシェークスピアなのか、なぜ西洋の古典をリーがやる必要があるのか？と。キャンプ中には、そのことをリー含めて議論してきました。そうして1週間くらい経って、円盤に乗る派との交流会の時、自己紹介でリーが「自分はクィアとドラァグに向き合っていて、自分が求める美しさを考えるために、ソネットを使っていこうと思う」みたいなことを言っていて。今まで話してきたことが全て繋がって素晴らしい！と思いました。しかも最終プレゼンでは、「これまではっきり言えなかったけれど、自分はドラァグに向き合っていきます」と堂々と言うようになっていた。その一連のプロセスに立ち会えたことで、ファシリテーターをやっていた良かったと思いました。

竹中

あと、表現の現場のハラスメント問題について長いこと考えている身として、今回 CDT（コミュニケーション・デザイン・チーム）がいてくれて本当に良かったなと思っています。彼らがキャンパーと話してくれたり、気になったことがあればすぐに伝えてくれるのが本当に心強いと思っていました。これまで私は、ワークショップやオーディションの時に、ハラスメント対策ガイドラインを提示すれば対策に取り組んだ感が出てしまうことが、すごい嫌だなと思っていました。このように人が集まる場において、割くべきは人件費だと思うんです。もちろん作品制作そのものにお金を持ってくるといことも大事だけれど、本当に意識が高く素晴らしい人材にしっかりお金をかけて、一緒にいてもらうことの安心感って、何にも代え難いと考えています。ファシリテーターとして場をうまく動かすことに集中してしまっ、安全を見落とすことがあると思っていて。そういう環境の中で、安全を託せる存在があることが心強かったし、そういうことを大切にしていかなきゃいけないなと改めて認識しました。

—— ありがとうございます。それぞれ得られたことが多かったのだと拝察します。最後に、今後のおふたりが挑戦したいこと、ドリームプランを教えてくださいませんか。

竹中

オンラインでのドリームプランのプレゼン、(アシスタントライターの柳原) 実和さんの話が心に残っています。彼女は、未来の自分に「今何をしている？」ということ聞きに行く、という体裁のもので、自分がこれから先やってみたくことを素直に話していました。やっぱり大人になるとどうしてもお金などのことを考えてしまうけれど、そうではなくて、ピュアに自分のやりたいことをやっていきたいと思えました。

田村

私は、教えるのではなくて場を用意することによって若い人たちが成長していく姿を見届けるのが、自分にとって嬉しいことなんだと確認できたのが良かったですね。自分自身のキャリアはもちろんこれからも考えていくと思うけれど、年齢的にも、自分が手にしている権力、パワーみたいなものを次の世代にどう渡していくかを考えるべきだと思っていて。そういうことをして自分が喜べるんだということに、安心したかも。自分がまだその準備が整ってなかったら、なんて言うんだろう、彼らを見て羨ましく思っちゃうと思うんですよ。

竹中

うんうん、なんか悔しいっていうか、私もそういうのやりたい、みたいな。

田村

ね。妬みというか。でも今回は、本当に心から嬉しくて。キャンパーたちがそれぞれスッキリした顔で帰っていくのを見て、お母さんみたいな気持ちになっていて。そういう経験をしたことが自信になりました。これからも場作り、プロデュース、ディレクションを通して、より多くの若い人たちが、希望を持てるようにしたいと思っています。

取材：今宿未悠、柳原実和 構成・文：今宿未悠



## 参加者インタビュー キム・ナミョン

ファシリテーターとキャンプ参加者はどんな時間を過ごしてきたのか。5人の参加者の中から、私たちはナミョンにインタビューした。彼女は、観客を積極的にパフォーマンスに参加させるに加えて、通訳を担当した森本優芽（コミュニケーションデザインチーム）をパフォーマンスのパートナーとすることにも挑戦した。「互恵」というキーワードが、観客そして通訳者との間に浮かび上がることに期待を込めて。

### 異なるバックグラウンドを持つ人との出会いを求めて

—— キャンプに応募した理由を教えてください。

さまざまな文化や問題意識を持っている人と出会える場所に身を置いてみたかったんです。パフォーマーとして、今までは韓国の友人や観客に囲まれてきましたが、異なるバックグラウンドを持つ人の視点をもらいたくて。同じパフォーマンスを観ても、それぞれの持つバックグラウンドによって、受け止め方が違うだろうと思っていました。それに加えて、私の好きな演出家のひとりである岡田利規さんについて、そして東京のパフォーミングアーツの現場についても知りたかったです。

—— 異なるバックグラウンドを持つ人たちと、実際にどのように関係性を築いていきましたか。

キャンプのメンバーとは、それぞれの国やアートの現場で経験している困難だったり、個人的な歴史だったり、いろいろなことを話しました。キャンプの1日のプログラムが終わった後も、毎晩ホテルのテーブルに集まって、アイスクリームを一緒に食べながら。互いに親密な関係を作り上げていく中で、いろんな形の愛やケアを感じました。特に私は英語が苦手なのですが、私の意図を探りながら意見を聞いてくれたのが、とてもありがたかったです。

—— ファシリテーターのおふたりとは？

(竹中) 香子のワークショップでの「他の人の経験を、私の身体を通して伝える」ワークには、影響を受けました。私は普段、自分の経験をベースに作品をつくっていますが、それを次のレベルに発展させる体験ができたのです。それは、優芽と行った最終プレゼンテーション (P.6) にも繋がりました。リハーサルで自分の声量に悩んでいた時にも、香子にアドバイスをもらいました。

(田村) かのこに関しては、フィードバックの伝え方がとても好きでした。たとえば、私のワークショップでは、参加者同士、個人的な経験をお互いにシェアしてもらいましたが、それがプライベートな内容を含むということに自分では気づかなくて。かのこは「私たちには、すでにいろんな感情や考えをシェアしているという土台がある。だからこそこのワークショップはうまくいってるけれども、もしそういった関係性がなかったら、全然違う形になってしまうのではないかと指摘してくれました。かのこからは、ワークショップに限らず芸術作品の見方を学んだと思っています。

—— そのほか、印象に残っていることはありますか。

寺田健人さんのワークショップが印象に残っています。沖縄の戦争の歴史、日本と沖縄の関係性について知ることができ、韓国の歴史との類似点を感じ取りました。サキのワークショップの内容ともつながりますが、キャンプを通して、歴史というものが実は、私が思っていたよりもずっと自分に近いもの、自分と繋がっているものだとことに気づきました。そういった意味で、私の身体が拡張しているように感じています。また、岡田利規さんには作品について直接質問することができました。ワークショップの前に東京芸術祭の演目『リビングルームのメタモルフォーシス』を観る機会があったのですが、ステージ上に置いてあった家具が本当に素晴らしいなと思って。岡田さんは舞台美術の製作を、ステージデザイナーではなくビジュアルアーティストや建築家をお願いすることが多いとのことでした。とても興味深かったです。

—— 岡田さんの作品づくりを知ることで、身体に向ける関心が、より具体的な空間との関係性にまで広がっていきそうですね。最終プレゼンテーションでのパフォーマンスでやろうとしていたこと、そしてパフォーマンスを経て受け取ったものについて聞かせてください。

私がこのパフォーマンスでやろうとしていたことは、「翻訳し合う」やりとりを通して、ユウメとの関係性を深めることでした。本番中は緊張感もありましたが、ふたりの間に笑いが生まれる瞬間があって。ユウメとの繋がりを感じられました。パフォーマンスを終えて、いろんなコメントをもらえたこと、(バックグラウンドの違いに関わらず) 私のパフォーマンスを見て共感してくれる人がいるとわかったことが、大きな収穫でした。



## さらに膨らんだドリームプラン

—— キャンプを終えたナミョンのドリームプランを聞かせてください。

夢のひとつは、日本との継続的な関係を築きあげることです。(アートに関わる)スペースやレジデンスに行きたいと考えています。ほかの国で行われるパフォーマンスアーツのフェスティバルにも参加したいですね。また、キャンプで出会ったメンバーと共に、それぞれの活動する環境における相違点・類似点にまつわるプロジェクトを作りたいと思っています。今も活発に連絡を取り合っているので、今後も長期的なつながりを深めていきたいです。

—— 個人のアーティストとしては、これからどんなパフォーマンスをしていきたいですか。

私がテーマとしている「忘却、記憶、記録」は、歴史と関係していると思っています。記録されないストーリーももちろんたくさんあるけれど、記録されるストーリーがどのように身体から身体へ情報として受け継がれるかについて、もっと探求していきたいです。

取材：今宿未悠、柳原実和 構成・文：柳原実和



撮影：松本和幸

## プロセス発信記事①

### 他者の身に起きたことを自らの言葉で語る

#### 不安、迷い、違和感のなかで「互恵」に辿り着く過程（今宿未悠）

身体に起きたことは、いかに言葉にしうるのか。これが私の、生活 / 創作する上での問題意識である。私は普段、詩人・パフォーマンスアーティストとして、身体と言語の領域を横断しながら創作活動を行っている。基本的な作品のスタイルは、まずなんらかの身体的な実践を行い（これが「パフォーマンス」として位置づけられることが多い）、その実践の記憶を飛翔させる形で言葉にする（これが「詩」として位置づけられることが多い）というものである。

このような創作者としての背景ゆえに、本プログラムに参加するにあたっての面接では「なぜパフォーマーの枠で参加しないのですか」という質問を受けた。答えは明確で、キャンプ参加者の身体に起きていることを、私が第三者の視点から言葉にする、ということに挑戦してみたかったからである。

どんなに凄まじい（つまり、言葉にしがいのある）身体と出会うことができるだろうか……そんな期待に胸を膨らませながら、キャンプが幕を開けた。

蓋をあけてみれば、そこには「言語の世界」が広がっていた。キャンプ参加者のうち、ピュアなパフォーマーとして活動しているのは数名で、マネージャーやファシリテーターとしての肩書を持つ参加者も多くいた。そして、そんな彼らが2週間かけて参加するプログラムにおいて、身体を動かす時間はほとんどと言っていいほどないように感じられ、むしろ言語的なコミュニケーションが常に起きていた。議論や対話が大半を占めるワークショップ、プログラム前後の自己紹介やチェックイン……絶えざる言語の応酬!!! 予想外の事態に立ちつくしながらも、観察を続けていると、彼らがワークショップやレクチャーを通じて実践するコミュニケーションのあり方に、ひとつの共通性が見えてきた。

その共通性を端的に述べるなら「誰かの言ったことを、自分のものとして語り直してみる」というあり方である。

個別のプログラムを振り返ってみる。キャンプのファシリテーターであり、普段は俳優教育を行っている香子さんのワークショップでは、ある参加者Aがした「自分にとって大切な物」についての語りを、別の参加者Bが一人称と三人称で語り直すという試みが行われた。これと同様の構造が、キャンプ参加者のワークショップにもみられた。たとえばアリスのワークショップにおいては、まず「ケア」にまつわる質問を参加者に投げかけ、その答えを付箋に匿名で回答してもらう。その付箋を混ぜ合わせ、くじ引き的に別の人が付箋を引き、それを読みあげていった。また、ナミョンのワークショップは、参加者同士がペアになり、過去の出来事を粘土やメモ書きを通して語りあい、その語りを交換してみるというものだった。

キャンプ参加者だけでなく、キャンプに招かれたゲストたちにも、同じような手つきがあった。岡田利規のワークショップでは、まず初めに参加者それぞれが自分の家の間取りやそこで起きていることについてジェスチャーを交えて語り、それを別の誰かが再演するというもの。みんなで訪れた山梨県の6okkenのリーダーである筒は、彼の開発した「ドキュメンタリー・アクティング」という方法論に基づいて、6okkenメンバーのある日の食卓を、彼らのことを知っている筒にインタビューすることを通じて再演するというワークショップを用意していた。

ワークショップだけではない。キャンプの全体の構造自体も「語り直し」に大きく関わっている。それは特に、通訳というプロセスにおいて顕著である。非日本語話者が多くを占めるキャンプ参加者たちと、キャンプのゲスト講師や観客との間で起きるコミュニケーションには、多くの場合CDT（コミュニケーション・デザイン・チーム）と呼ばれる通訳者たちが帯同していた。彼らは自分たちのあり方に慎重だった。通訳には逐次、同時などいくつかの種類がある。それによって観客にどのような印象の差が生じるのかをキャンプの参加者たちに対してじっくり説明し、彼らにとって適切な方法は何か、議論を重ねていた。

私たちライターも、語り直しの問題の当事者であった。ライターは、最終プレゼンテーションに向けて、キャンプ2日目にオンラインで行われた「ドリームプラン・プレゼンテーション」実施について、観客に配布する用のレポートを仕上げるという仕事が課されていた。そこで私たちは、キャンプ参加者のドリームプランについての発話を「I」と「he/she/they」という2種類の人称を用いて語る試みを行ったのである。

このように、キャンプに参加した多くの人々にとって、それぞれの形式は異なるものの「語り直すこと」がひとつの大きな問題意識として共有されていたように思われる。

なぜ、今回のキャンプにおいては「語り直し」つまり言語に基づくコミュニケーションのあり方が頻繁に用いられたのだろうか？

私自身、上記の問いを、ファシリテーターである香子さんにぶつけたことがあった。身体的な表現を目の当たりにすることを望んでキャンプに参加した身として、その理由を知りたかったのだ。キャンプ中盤、6okkenの合宿にて、夜が深まったタイミングでの出来事である。皆が手をつけたお酒やポテトチップスが散らばるテーブルを横目に、私はこう問うた。

「今回のキャンプって、みんな言葉を使って何かをしていますよね。パフォーミングアーツだから、私はてっきりもっと体を使うものだと思っていたんですけど。」

これに対し、香子さんの答えは極めて明快だった。

「パフォーミングアーツは絶対に集団で行うもの。個人で完結し得ない創作において、集団が共有するビジョンやコンセプトをどのようにすり合わせていくかは、常に問題になる。だからこそ、その練習のためにも、言葉が大切にされているんじゃないかな。」

特に、今年のキャンプのテーマは「互恵」である。互恵を実現するためには、今の自分に何ができて、相手は何を求めているのか、相手には何ができるのか、ということを手帳に擦り合わせていくことが重要である。また、今回のキャンプ参加者には、アーティストだけでなく、創作環境を改善しようとするファシリテーターやマネージャーといった肩書きを持つものも多々いる。であれば、なおさらパフォーミングアーツと聞いてパッと思い浮かぶような、舞台上で照明を浴びる身体のみならず、その背景を支えるコミュニケーション、言葉の問題を考えることが重要だったのではないだろうか。

さらに、今年のキャンプでは、「ハラスメントとは何か」「いかにして私たちは安全な創作環境を作るのか」という議論も行われ、参加者たちには言語と身体双方において互恵的なコミュニケーションが求められた。このような場において、他者の語りを再構築することは、単に情報を伝える手段ではなく、相互理解を促進するための実践である。

では、「誰かの言ったことを、自分のものとして語り直してみる」実践を行ったとき、キャンプ参加者たちにいったいどういった感覚が生じていたのだろうか。

まず初めに、他者に対するリスペクトが生まれるだろう。語り直すために、他者の発言に慎重に耳を傾けるようになる。実際、6okkenのリーダーである筒は互いを理解しようとする方法論として「ドキュメンタリー・アクティング」を位置付けている。しかしながら、参加者が抱いたのは単なるリスペクトや興味だけではなく、複雑な感情の渦であった。

まず、「語る側」のことを考えてみよう。誰かの言葉を自分のものとして語る時、そこには「本当にこの言葉でよいのか」「相手の意図を正確に反映できているのか」といった不安や迷い、そして相手の感情を歪めてしまうのではという罪悪感が生じる。実際、キャンプ参加者たちから、そういった不安にまつわる発言が多く聞かれた。岡田のワークショップにおいては、語り直しを実践した後に、「もし間違っていたらごめんさいね」というキャンパーがいたり、迷って途中で動きが止まる瞬間などもあった。

他者の身に起きたこと、他者の言葉は他者のものであり、そこに自分が勝手に立ち入って、本人の意図とは異なる形で解釈を施すことへの抵抗、なるべく他者の思った通りに伝達すべきであるという考えが、参加者に共通してあることがわかる。

「語られる」当人がその場にはいないときは、さらにその感情が増大するように思われる。6okkenにて行われた筒のワークショップでは、語り直す対象となる人物は動画の中にしか残されておらず、また語り直しが終わるまでその動画すら見させてもらえない、という状況があった。その中で、キャンプ参加者たちは演じる対象となる人物を知っている筒に対してインタビューすることを通じてなんとかその人物に近づこうとするものの、本当にこれでいいのか、という迷いを捨てきれずに、わからないところは想像で補うのではなく曖昧に空白としてのごす、という態度がみられた。当人がその場にいれば、反応が返ってきて、自分のやっていることの正誤を判定できる。そうでない環境に対する恐怖があったように思う。

他方で、「語られる側」のことを考えてみよう。ここで取り上げたい事例は、ライターがキャンプ参加者たちのドリームプランを一人称「I」を主語として語り直し記事化しようとした時の出来事である。キャンプ参加者たちの多くは、ライターが書いた文章に対して、多くの訂正線を引き、修正事項をたくさん書いた。この言い方はここが違う、この単語はこっちに直して欲しい、など……。結果的に、ライターの書いた言葉はほとんど消され、キャンプ参加者自ら書いたと同然となった文章もあった。自分のドリームプランについての記事である以上、自分が最も納得する形で書かれない。キャンプ参加者たちがそう考えたのも無理はないだろう。

ここには、人称の問題が大きく横たわっている。実は先ほど述べたライターの記事について、三人称「he/she/they」を使った方の文章には、ほとんど訂正が入らなかったのだ。他者が自らのことを「私」として語り出すことに対するのびきりならなさ（特に彼らは表現者であるがゆえ）を感じ取ることのできる機会となった。



さて、先述したように、パフォーマンスアーツの現場は集団制作を基本とする。実際の現場の、集団制作過程のコミュニケーションにおいては、これまで確認してきたような「語り直しに対する不安」や「語り直されることに対する違和感の言語化」が果たしてどれくらい実践されているだろうか。実は、多くの不安や違和感は捨象され、ある程度「これくらい大丈夫だろう」「これはみんな理解/合意しているだろう」という、暗黙の前提をもとにしたコミュニケーションが行われることも多いのではないだろうか。実際、今回のキャンプにはCDTのメンバーがおり、彼らがキャンプ前にジェンダープロナウンの扱いや他者尊重にかかわるワークショップを行っていたものの、現場ではジェンダーに対する一面的な発話がみられたり、でもそれに対して（私を含む）多くの人々が聞けなかったことにする、という瞬間が（数は少ないにせよ）確かにあったように感じている。

コミュニケーションの問題を意識的に扱う時にはできたことが、無意識的な日常においてはできなくなる。これは当たり前のことではある。だからこそ、私たちは何度も練習しなくてはならないし、そのためにワークショップがあるのだと思う。

2週間のキャンプをへて、メンバーたちはそれぞれの場所へと旅立っていった。「互恵」というテーマのもと過ごした2週間。何度も自分自身について開示し、他者と人称を交換しあい、それぞれへの理解を深めてきた。ただ、「ケアとはプロセスである」(Nursing: Human Science and Human Care - A Theory of Nursing, Jean Watson, 1985) という言葉があるように、誰かを理解しようとしたり尊重したりする行為に結果が訪れることはない。それぞれの大切な人々と、それぞれの場所で制作を育むために。キャンプの2週間がどのようなものであったかは、今後参加者が歩む過程において試されていくだろう。



#### いましゆく・みゆう

2000年、東京都生まれ。詩人/パフォーマンスアーティスト。言葉と身体の領域を往還するなかで、自己と他者/世界が、やわらかにたしかに統合する方法を模索する。

ままならない自分の輪郭をもっとほどこいて他者や他物と関係を結びあい、あたらしい知覚、思考、行為に遭遇するために、装置や状況を作りそれらに巻き込まれるような身体的実践を行う。実践によって遭遇した知覚、思考、行為を記憶し、再構成し、更新するために、詩を書くことを試みている。主な受賞に、第一回西脇順三郎賞新人賞、主な出版物に、詩集『還るためのプラクティス』（七月堂）がある。

（撮影：堀裕貴）

## プロセス発信記事②

### 互恵を可能にする場づくり

#### 「共感」と「興味」を土台に、変わり続けるという試み（柳原実和）

今回のキャンプは、参加者それぞれが「違ったまま一緒にいる」ことを練習・実践する場になった。それはファシリテーターがキーワードとして掲げた「互恵」を可能にする場であり、他者と協働しより良いアイデアや作品を生み出すことにつながる。実際、2週間の過程の中でも、最終プレゼンテーションというひとつの結果においても、より良いアイデアや作品が生まれていく様子が見られた。しかし「違ったまま一緒にいる」ことは、簡単なことではない。誰も、他者と意見がぶつかった経験を持っているだろう。傷つくことを恐れて、他者の意見に迎合してしまうこともある。それは、長年時間を共にしてきた友人/家族関係の間でも起こりうることだ。それでは、なぜ2週間という限られた時間の中で、そのような場を確立・存続することができたのだろうか。それは、「違い」を受け入れる以前に、互いに対する「共感」と「興味」が土台にあったからだとは私は考える。

#### 「共感」と「興味」が、「違い」を受け入れる器を作る

はじめに「共感」の土台を作ったのは、コミュニケーションデザインチーム（以下 CDT）による初日のウォーミングアップだった。そこで私たちは、音声言語を用いずにコミュニケーションをとることになった。

一言も話さずに、お題に従って一列に並ぶワーク。ひとつ目のお題は、朝起きた時間だ。ほかの人よりも早い自信がある人は前へ、遅い自信がある人は後ろへと移動する。母国語がなんであれ、全員が指で時間を表して確認し合う。そうして、最終的には10分の差まで正確に並ぶことに成功した。ふたつ目は、目の色の明るさ。ひとつ目のお題が一对一のコミュニケーションだったのに対し、(自分で自分の目を見ることはできないので、)ここでは3人以上のコミュニケーションが必要になった。出会ったばかりのお互いの目を、喜びと照れ臭さを抱えながら、じっくりと見つめた。

これ以前にオンラインキャンプを2回行っていったものの、レクチャーやスピーチの形式だったので、参加者同士で会話をする機会はほとんどなかった。特にファームラボ ビジターは、この日が初めての参加だったので、音声言語で会話することよりも先に、非言語コミュニケーションをとったことになる。このワークが参加者にもたらしたものは、非言語コミュニケーションの持つ可能性だけではない。母国語が違っても数字や色といった共通言語を持っていることを知り、確かに通じ合えたという感覚を共有すること、つまり「共感」する経験だった。

母国語が同じであれば、対話を重ねることで共通言語を作り出していくという方法も考えられる。より良いものを作りたいという想いや、その場に集まった共通の目的を、共通言語と呼ぶこともできるだろう。しかし、プロジェクトの初期段階で全員が「共感」する経験を可能にするには、今回のように、人間であれば誰もが持ち合わせている共通言語を使うことが最適だ。対話による「共感」は、その後でも十分間に合う（後述のリーのワークショップはその一例）。

「興味」に関しては、このキャンプに参加している時点で持っているはずだった。ただ、その対象は必ずしも全員共通ではないし、程度はそれぞれ。ここで、誰も共通して持つことのできる「興味」の形があるとするならば、私はそれを他者に対する意識の矢印、あるいは聞く姿勢と言い換えてみたい。それは参加者の全員が必ず経験できることだった。なぜなら、さまざまな英語を話す人が集まっていたからだ。たとえば、英語の流暢さは（優劣ではなく）違いのひとつである。それによってもたらされるのは、相手の言わんとしていることを理解しようと積極的に聞く姿勢だ。先のウォーミングアップで経験した通り、音声以外の表現も含めて相手のメッセージを受け取ろうとしたり、相手が見ているであろう世界を想像したりすることになる。

それぞれ違う英語を話しているという前提は、「共感」と同じく初日に、CDTのレクチャーにおいても共有された。そこでは知識として頭で理解されたが、キャンプが進んでいく過程で、参加者はその違いを体感を伴って理解することになった。その例のひとつとして、他者の物語を自分ごとのように話す「語り直し」の手法が挙げられる。それは、竹中、ナミオン、岡田のワークショップに共通して取り入れられた。他者の語りをただ繰り返すのではなく、他者を演じよう・他者に近づこうとすることで、違和感を感じるようになった。それは、言葉が（物語をともなった）身体に属しているため、そしてその身体が人それぞれ異なるためだ。

その他のワークショップにおいても、「共感」と「興味」が育まれうる場面があった。リーのワークショップでは、シェイクスピアのソネットを読んで、それぞれが感じたことをキーワードとして出し合った。それはシェイクスピアの時代と現代の私たちの間で「共感」できること、同時代に異なるバックグラウンドを持って生きている私たちの中で「共感」できることを見つけることでもあった（この時、仲間が見つからないキーワードの行き先として、セーフティーボックスが作られた。それは、「共感」できない、ひとつにまとめられないからという理由で切り捨てるのではなく、すべての意見を等しくリスペクトすることの表れでもあった）。

ティンのワークショップで行ったペアワークは、他者の言葉を聞く練習になった。ひとりがタロットカードを引き、何がどのように見えるかを語る。もうひとりは質問者となり、回答者の言葉と想像力を引き出すサポートをする。その際、ティンは「回答者の言葉を使って質問するように」とアドバイスした。そうして、質問者の「興味」は回答者に向くことになった。質問者にとってそれは、自分の世界を出て他者の世界に入るような行為で、時に「共感」に似たものさえ感じさせた。

## 「違ったまま一緒にいる」ことは、影響を受けること、変わること

「共感」と「興味」を土台にした上で、「違ったまま一緒にいる」。それは、互恵の源である互いの「違い」を活かし合う行為だった。私（たち）が目撃したその過程は、次のファシリテーターの言葉に表れている通りだった。田村は、最終プレゼンテーションのパンフレットでこのように述べている。「……（「互恵」という）この言葉には、他者を思いやり、与え合うだけでなく、それぞれの脆さや差異をそのまま認め合い、失敗を恐れずに挑戦できる環境を自分たちで築いていくために、自らも常に変化していくイメージを込めています（下線筆者）」。互いの差異を認め合うことは、「共感」と「興味」が前提にあればそれほど恐ろしいことではない。一度「共感」を経験しているからこそ、もっと近づきたい・わかりたいという気持ちを、希望と共に抱くことができる。ここでは、変化しつづけることについて詳しく考えてみたい。

「違ったまま一緒にいる」ことができると、互いに影響を受けて、自己が変わり続けることになる。より良い方向を求めて、自然と変わり続けるのだ。それは、CDTによるレクチャーでも学んだことだった。「(出自などにかかわらず安心して発言できる)セーフスペースは参加者同士の対話を通して構築され、更新され続けるもの」だ、と。

たとえば、ナミオンは自身のワークショップがアリスの影響を受けていたと語った。オンラインキャンプでアリスは「未来のことを考えるのは実はあまり得意ではない」と打ち明け、その時にできる方法でドリームプランを発表した。ありのままの自分を表現したことが、意図せず他者に影響を与えたのだった。また、アリスのワークショップのフィードバックを活かして、リーは自分のワークショップの時間にお菓子を食べてリラックスする時間を設けた。さらに、最終プレゼンテーションのリハーサルでは、ファシリテーターからのフィードバックを受けて最後の最後までそれぞれの発表内容を磨き続ける姿が見られ、当日は観客を積極的に取り込む方法がとられた。

影響を受けること、変わることを良しとする考え方は、アシスタントライターとしての私の在り方にも影響した。

私たちアシスタントライターは、オンラインキャンプでキャンプ参加者5人が発表したドリームプランを、一人称「私」を使って記録した。自分の視点をなるべく捨てて書くという挑戦をしようと思っていたが、出来あがった文章をいざ読むと自分の手垢ばかり見える気がした。他者をわかりきることはできないのだから、いっそ発表者本人に書いてもらった方がいいのではないか、という諦めさえ感じてしまった。それでもなぜ私が書くのか。その答えを、編集後記に書きたいと思った。しかし、その時点ではまだ言葉にならなかった。かといって、答えが出なかったと書くのは無責任に思えた。その結果、私はその問いには触れずに全く違うことを書いたのだった。その内容も決して嘘ではなかったが、私の心の大部分を占めていたのは先の問いだった。にも関わらず書かないという選択をしたことで、その問いをなかつたことになしたかのように感じられ、後悔が残った。

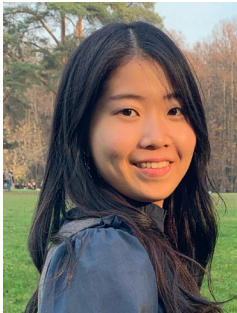
オンサイトキャンプが始まってすぐ、CDTワークショップのグループワークでのこと。コミュニケーションにおいて大切にしている価値観として「それぞれにとって必要な時間を尊重したい」という意見が出た。私は問いをなかつたものにしたのではなく、それが言葉になるための時間を自分に与えていたのかもしれない。さらにキャンプが進んでいくに従って、特に「語り直し」の手法を通して、問いの答えが見つかった。「私は、わからないからこそ他者に近づきたい。わかるために書くのだ」。対話の中で意見をぶつけ合うように、紙の上で言葉と言葉をぶつけ合うことによって、思考は発展する。「書いた文章は変えられない。書くことはとても責任の重い行為だ」と私の肩に入っていた力は抜け、その時の私だからこそ書ける精一杯の文章を書き、必要となれば素直に訂正できる自分でいようと思えるようになった。



## キャンプの外へ、未来へつながる学び

このキャンプは、英語を共通言語とした国際共同の場だったが、ここで実践された「違ったままで一緒にいる」ための試みは、母国語が同じ、あるいは同じバックグラウンドを持っていると言われるようなグループにおいても、応用することができる。むしろ、そのような場面でこそ意識して取り入れられるべき手法だと言ってもいい。たとえば、ハラスメントが問題になる時、その要因の一つに、自分と相手が同じだと思い込んでいたり、対等に対話ができなかったりといった状況があるとす。それは、アートシーンに限ったことではない。他者と共になれば、いつでもどこでも起こりうることだ。他者とは自分と異なる誰かであり、そのような他者と共にいることは常に、わかり合えない部分や偏見と隣り合わせである。

誰ひとりとして全く同じ人間はおらず、完全に他者をわかりきることなどできない。それは悲しいことではなく、むしろ希望である。私たちは違うからこそ、一緒にいたいと思ひ、協働できる。このキャンプに関わった全ての人がここでの学びを広めていき、「違ったまま一緒にいる」ことを楽しみ、お互いの「違い」を活かし合うことができる場が増えていったらどうだろう。「共感」と「興味」に基づく安心感に包まれた、健全で創造的な創作活動が増えていくことを期待する。そうした創作現場の空気はきっと作品を通して伝わっていき、さらなる創造につながることだろう。



やなぎはら・みわ

東京を拠点とする俳優、ライター。「今ここで他者と共に振動する」をテーマに活動する。

東京プロジェクトスタディ 1「わたしの、あなたの、関わりをほぐす～共在・共創する新たな身体と思考を拓く～」に参加。主な出演作に、劇団チョコレートケーキ『〇六〇〇猶二人生存ス／その類、熱線に焼かれ』（古川健作、日澤雄介 演出）。

また、時間・空間を越えて（いつかの自分を含めた）他者とつながる取り組みを「きっとだれかのわすれもの」と名付けて、文通と zine の製作を行う。

